

# 東日本大震災から10年

## 宮城県石巻市・称法寺

東日本大震災から10年。津波で甚大な被害を受けた宮城県石巻市の称法寺を訪ねた。`震災を知らない、2人の青年僧侶が、「あの時この場にいなかった自分たちに何ができるのか」の問いを持ちながら、被災地の人たちと歩む姿があった。

# 被災地の人たちと共に歩む 震災知らない2人の僧侶

## 亡き住職のおい 仕事辞め石巻に

称法寺にほど近い日和山からは、同寺、そして海が見渡せる。震災後は境内全土が望めたが、手前に5階建ての災害公営住宅が建ち、茶色い瓦屋根がわずかに見えるだけ。更地が目立つ町中、海側には新しい道路が伸び、河口では架橋工事が進められている。細川雅美住職が2016年1月に亡くなり、実兄の松山善之さん（福島県相馬市・光善寺住職）が住職代務を務め、松山さんの息子、善洋さん（同寺衆徒、38）が常駐し、寺務を切り盛りする。作業衣に布袍と輪袈

つ町中、海側には新しい道路が伸び、河口では架橋工事が進められている。細川雅美住職が2016年1月に亡くなり、実兄の松山善之さん（福島県相馬市・光善寺住職）が住職代務を務め、松山さんの息子、善洋さん（同寺衆徒、38）が常駐し、寺務を切り盛りする。作業衣に布袍と輪袈

褌を着けた善洋さんは、境内を見渡して「きれいになったでしょ」とほほ笑んだ。10年前、同寺は津波にのみ込まれた。本堂は倒壊を免れたものの床から3メートルまで浸水。隣に建つ門徒会館は、津波の衝撃で壁が破れ、床板や畳はめくれ上がった。境内は、家具や生活用品、近くの製紙工場からの膨大な紙の束など、流入物で埋め尽くされた。

称法寺のある門脇町では、全壊した家屋は約1400棟にのぼった。「津波の犠牲になったご門徒は、おそらく150人から180人はおられるはず」と善洋さんは語る。門徒名簿も流失し、正確な人数はわかっていない。それほど被害は甚大だった。

## 同級生に誘われ 東北行きを決意

善洋さんが手伝い始めてから半年後、叔父が亡くなった。その日から、法務と寺の再建を引き継ぐことになった。そこで初めて、震災による叔父の苦悩や重責、再建の難しさを身をもって知った。「被災したお寺を何とか再建したい」。その思いで

善洋さんは東京の会社に勤めていたが、いずれは相馬に戻り寺を継ぐことになっていた。震災前から、勉強のために叔父の細川住職の寺を手伝う話が出ていたという。震災後、一人で抱えきれないほどの量の法務を続ける叔父。幼い頃、よく遊んでもらい楽しく過ごした記憶と、その叔父が苦しんでいる姿。何もできない自分が悲しくなった。そして3年後、会社を退職し、14年4月から1年間、京都の中央仏教学院で学び、妻子とともに石巻に移った。

法務を続けたが、2年近くが経った頃、体力も気力もすり減り、限界を感じた。本堂再建が始まったちょうど同じ頃の17年秋、中央仏教学院の同級生の結婚式で、同級生・松本良教さん（和歌山県海南市・了賢寺衆徒、38）と再会した。学院生時代、誰に対しても相手の立場に立ち、やさしく気遣いのできる松本さんの姿を思い出し、「一緒に復興を進めていけたらな」と心に思った。気がつけば「手を貸してほしい」と口にしていった。

## 「この方たちと同じ経験ないが」

松本さんは当時、本願寺の臨時勤務員。「震災を経験していない自分に何ができるのか」と悩み、すぐに返事はできなかった。家に帰り、胸の奥に押し込めていた後悔にも似た思いがこみ上げてきた。「3月11日は一人暮らしの京都の部屋で、テレビに映る被災地の様子をただぼろろと見ていた。定職に就かずフラフラし、何かしなければと思うが、ボランティアに行く勇氣もなかった」。数日後、松本さんは善洋さんに東北行きを決めたことを告げた。「必要として

もらえるなら」との思いと「これまでの分も」という決意で。震災を知らない2人。二人三脚で法務を行うようになり、まもなく3年となる。震災で途絶えていた常例法座を19年4月から再開した。また、ホームページやSNSで情報発信を行うほか、募参りの人の要望を聞いて墓地に水道やゴミ箱を設置するなど、気づいたこと、できることから少しずつ進めてきた。流失した門徒名簿の作成にもとりかかっている。

2人は「震災を知らない自分たちに何ができるか」の問いはいつも持ち続けている。声をそろえる。善洋さんは「普段の生活や関わり合いの中だけでは、被災者の現状は見えない。ここで生活を再建したい人、どうにもならないと感じている人、狭間にいる人…。みんな、根深いところではぬぐいきれないものを抱えているんだと思う」。松本さんは「車ごと津波に

流されたが電柱に引っかかって生き延びた経験を話してくださった方がいた。かける言葉が見当たらず、ただうなずいて聞くしかできなかった。どう振る舞うべきだったか、今も正解はわからない」と話す。そんな2人の歩みを温かく見守る人も増えた。たくさんの人から「遠いところから来てくれてありがとう」と声をかけられ、長年寺を支えてきた年配の人たちは青年僧侶の提案をいつでも、「いいじゃない。任せよう」と言ってくれる。2人は「この方たちと同じ経験はしていないが、向いている方向は違わない。私たちがこころほい、もう『第2の故郷』なんだ」と感じている。



宮城県石巻市・称法寺の復興に力を注ぐ松山善洋さん(右)と松本良教さん(左)



宮城県石巻市の高台・日和山から見渡す光景。津波で住宅が流された後の更地に災害公営住宅が建つ。その向こうに見える屋根が称法寺

# 「このお寺で一人でも多くの笑顔を」

3月11日、地震発生の後2時46分にあわせて追悼法要をつとめた。「10年前、京都でテレビを見ていた私が今、石巻で暮らしている。あの時こんな10年後を想像できなかったように、10年先は誰にもわからない。だからこそ、今は称法寺で一人でも多くの笑顔が見れるように」と松本さん。隣で善洋さんがうなずいた。